

卷頭言

宮本久雄

岩だらけでところどころに茶色の植物がへばりついている荒地をわたってゆくと、ワディ（谷）の辺にしがみつくようにして屹立している石造りの建物がみえてきました。汗だくのひたいをぬぐっていると、それが「マル・サバ」修道院だと友人が叫びました。あのイコノクラスムの時代に生き、エイコーン（イコン）を神学的に実践的に護りぬいたダマスコのヨアンネス（六五〇頃〜七五〇年頃）が生き著述した住居なのです。その時は、永遠の肉体の復活を願ってか、荒野の乾燥的気候によって白骨化しておかれている修道士たちのミイラに心をうばわれて、それほどそのヨアンネスの生涯には注意しませんでした。けれども「イコン」とのつき合いが長くなると、ヨアンネスが肉体の復活に至る神の子の受肉にイコン思想の基礎をおいていたことを知り、当時の状況をまざまざと想い出したわけです。

この受肉については、すでに人類史の中に予感みたいなのが洞察されますまいか。日本の神道にあって、神的なものが自然の中の大木や巨岩などに宿る「よりしろ」の思想があり、それがまた人間にも宿るわ

けです。ただし現代の哲学者J・L・マリオンは、こうしたとうとい神的な存在を宿すものが自分に人間の視点を全部とり集めて、それ自体が神であるとする場合、偶像になってしまふと警告します。それに対してヨアンネスが洞察したイコンとは、自らのすがたを透明にしてさらに人間の心の視線を神にまで運ぶ像であるといえましょう。そのためイコンは立体的でなく平面的にパタン化して描かれているわけです。その意味でヨアンネスがいうように、マリヤや聖人の顔は真のイコンとして、わたしたちをはるかな世界にさそい、わたしたち自身も大いなる方の前で透明になるように今日も働き（エネルギー）かけています。日本語の「顔」に関わる言い方には、わたしたちの人間観を示すしなのかもしれないかもしれませんが、顔役、顔を立てる、顔が広い、顔を貸す、顔をつぶす、顔を売る、顔をそろえるなど、どうも顔という言葉には権力志向や自己主張の意味が大きいようです。あるいは現代は、人間の顔が見えない時代、顔が崩壊した時代ともいわれます。どこに顔を向けたら、自らの顔も内から透明に輝き、そして他者とのよき出会いのよすがとなるような「顔」（エイコン）にめぐり会えるのでしょうか。

E・レヴィナスは、裸にされ暴力にさらされた貧しい顔との出会いに、無限なる神の栄光が過ぎ越すと語りました。わたしたちは、G・ルオーが描くキリストの顔の中に、実に現代的イコンを垣間みることができるとも知れません。いずれにせよ、ヨアンネスなどが伝えたビザンティンやロシアのイコンは、そうした日本的な人間観や社会に、さらに仮想現実の支配の急迫する現代の顔なき時代の危機において、とうとい実在がわたしたちの間に宿っていることの自覚とその出会いの地平を披いてくれる現実中の現実といえましょう。